

タイトル：2024 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 25 回）

日時：2024 年 12 月 20 日（金）～21 日（土）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「ナージー・アル＝アリーの風刺画に見るパレスチナ解放——他地域を巻き込んだ闘争への訴えかけ——」  
濱中麻梨菜（東京大学大学院）

以前、自身がまだ修士課程の時に教育セミナーへの参加経験があり、それが非常に充実した内容であったため、博士課程に進学した際には本研究セミナーに参加したいと考えていた。そのため、今回の参加は念願の初参加であった。機会をくださった AA 研の皆様に、先に心より御礼申し上げたい。

今回の発表では、パレスチナ人風刺画家ナージー・アル＝アリー（Najī al-‘Alī：1936–1987）の 1980 年代の作品に焦点を当てた。アル＝アリーは、パレスチナで風刺画が重要な表現手法の一つとなるきっかけを作ったとともに、風刺画を通じイスラエルとパレスチナの双方に対して批判を展開したことで知られている。

パレスチナにおいて風刺画はナクバの発生を契機に誕生し、批評のメディアとして発展してきた。特に 1967 年以降、イスラエルによる検閲や統制が強化された状況において、皮肉的表現が凝縮された風刺という手法と視覚的イメージによって、パレスチナ社会において多様な層に受容されてきた。特にアル＝アリーは独自の表現手法とともに、イスラエルのみならず同胞であるパレスチナ人に対しても鋭い批判を行い、活動時期の 1960 年代から 1980 年代にかけて、パレスチナのみならずアラブ世界においても広く名を知られた。

では、なぜアル＝アリーはそれほど影響力のある風刺画家になったのか。この問いに答えるため本発表では、特に 1980 年代のアル＝アリーの作品に注目した。1980 年代は、レバノン侵攻（1982 年）を機にアル＝アリーがパレスチナの指導者らに対し激しい批判を展開した時期であり、結果的に彼は 1987 年にロンドンで暗殺された。すなわち 1980 年代という時期は、アル＝アリーの風刺画家としてのキャリアの最後にあたる時期であったとともに、彼の政治的思想が前面に表出した時期であった。資料分析では、当時アル＝アリーが作品を掲載していたクウェートの新聞『アル＝カバス (*al-Qabas*)』を一次資料として用い、新聞の報道記事や日付などを参照することで、当時のパレスチナ情勢とともに風刺画を分析することを試みた。それとともに、風刺画の表現技法への着目によって、アル＝アリーがパレスチナ解放闘争を他地域をも巻き込む必要のあるものとして提示し、普遍的な人道問題として位置付けようとしていた可能性について考察した。

今回のセミナーで研究に対して指摘を受けた中で、以下の二点が特に重要な指摘であった。第一に、「影響力」という言葉を用いる妥当性についてである。本研究では「なぜアル＝アリーはパレスチナ社会において影響力のある風刺画家になったのか」という問いを掲げたが、そもそも「影響力」は立証が困難であり、また、いかなる判断基準をもって影響力があると見なすのが非常に難しいものである。第二に、本発表では、パレスチナ人の創作物が、創作者たちの思いとは別にして、故郷の地パレスチナと結びつけられて解釈されている状況に対する問題意識があり、そうした状況をパレスチナ人の「ナショナリズム」と結びつけたものとして説明した。だが、ナショナリズムという大きな言葉で捉えることによって、前述の通りの意味合いが正確に伝わらなくなってしまうこと、また、その語を用いることの妥当性についても指摘を受けた。以上の点は、やはり自身では気付くことができなかった点であり、本研究セミナーへの参加によって、議論の再構築の機会になったとともに、今後の研究に新たな展望を持つことができた。以上、簡単な感想ではあるが、改めて、この度の研究セミナーにご協力いただいた先生方、事務局の皆様、受講生の皆様に心より感謝申し上げます。